

## 就労継続に関する問題について考える—都道府県士会での会員支援の取り組みから—

<sup>1)</sup>(公社) 神奈川県理学療法士会事務局会員ライフサポート部,

<sup>2)</sup>(公社) 東京都理学療法士協会事務局ライフサポート部,

<sup>3)</sup>(一社) 長野県理学療法士会社会局厚生部,

<sup>4)</sup>(一社) 千葉県理学療法士会職能局WLB部,

<sup>5)</sup>(公社) 福岡県理学療法士会総務局組織部

大槻かおる<sup>1)</sup>, 岡安 健<sup>2)</sup>, 町田 靖<sup>3)</sup>, 西本 浩子<sup>4)</sup>, 永野 忍<sup>5)</sup>, 大島奈緒美<sup>1)</sup>

### 【シンポジウムの企画背景】

(公社) 神奈川県理学療法士会では、以前より会員支援事業に力を入れて取り組んできました。第49回日本理学療法学会大会においては、結婚・育児に関連する問題だけでなく、介護、離職後の復職など様々な形の就業継続に関する問題も取り上げました。本会では、就業継続支援の重要性を認識していますが、実際の支援活動は課題も多く、悩みながら継続しているのが現状です。そこで、今回は各士会の取り組みや課題を出し合い、身近な問題としてより多くの人に関心をもってもらえるようにしたいと考えています。

### 【就業継続支援に関するアンケート調査結果】

事前に各士会にアンケート調査を実施しました(回収率80%)。結果、半数はすでに支援事業を行っており、今後の検討課題にしている士会も多い状況でした。会員への調査活動は12士会で行われ、検討中の士会も含め会員の実態を把握しようとする動きも多く見られました。しかし会員の実態把握は難しく、具体的な活動を支援

に結びつけることは容易ではないという意見が多くありました。また、予算やマンパワーの問題で、積極的な取り組みを困難にしている部分もあるようです。管理する立場や今後就業困難になる可能性のある会員にも、就業環境を改善するための知識を増やし、意識変革ができるような教育も必要という意見も多くありました。今回のアンケートから積極的に取り組まれている士会を代表して、シンポジストとして活動報告をしていただきます。

### <座長>

(公社) 神奈川県理学療法士会 事務局会員ライフサポート部 大槻かおる・大島奈緒美

### <シンポジスト>

(公社) 東京都理学療法士会 事務局ライフサポート部 岡安健氏

(一社) 長野県理学療法士会 社会局厚生部 町田靖氏

(一社) 千葉県理学療法士会 職能局 WLB 部 西本浩子氏

(公社) 福岡県理学療法士会 総務局組織部 永野忍氏

## 理学療法の未来 クロージングシンポジウム—これからの理学療法の可能性への挑戦—

### 1 運動障害の分析法とそのアプローチの展望について

京都大学大学院医学研究科 大畑 光司

中枢性運動障害を持つ患者の動作を評価することは運動療法介入の方向性を決定する重要な手順である。近年、定量的な運動解析機器を用いた多くの知見が報告されており、個別の運動における疾患特性や動作特性が明らかになってきている。しかし、臨床現場では日常的に大掛かりな運動解析機器を用いることは難しく、仮にそのような機器を用いたとしても、問題となる運動指標を明確に定めなければ、臨床の有用性は低い。臨床現場において、様々な病態を呈する中枢神経疾患の動作の異常性を定量的に解釈する運動指標は定まっておらず、運動分析やその解釈の多くは、経験に基づく定性評価によって行われている。一般に三次元動作・運動解析などの指標を見る場合、単一の関節ごとの角度変化や角速度、関節モーメントなどの変化を問題にすることが多い。運動の問題点の主体が個別の関節の運動にある運動器疾患の場合は、そのような関節の運動を中心にして、運動を考察することが可能である。し

かし、中枢神経疾患の動作・運動障害をとらえる場合には、単に関節の運動変化としてではなく、多関節運動である個々の動作・運動課題の特徴を抽出して数値化する必要がある。単関節の運動(運動範囲や角度のピークなど)のみに着目すると、問題の中心となっている動作特性(不安定性や効率など)を見落とす可能性がある。つまり、運動器疾患と中枢神経疾患の運動学的解釈は、因果関係の考察の仕方が異なるといえる。中枢神経疾患患者においては全体的な運動に生じている問題点を見据えた後で、その問題が単一の関節の運動にどのように影響を与えているかを考えるべきであろう。そのような考え方に基づいて、本講演では中枢神経性運動障害を対象として運動を分析する場合にその異常性を把握するために用いられる評価方法とその解釈について供覧し、今後の運動評価や理学療法について展望する。